

新拾遺伏見院御製

とこの月はあき風のねやすにましてふくなべにふけて身にしむとこの月かげにほひといふにもけぶりといふにもか、はらず凡慮のをよぶところにあらざる名なるべし右やました水は長秋詠草にほひくるやました水をとめゆけばまそでにきくの露ぞうつるふ山した水といへるなめづらしく歌のとり所もよろしく侍れども菊のかたをもて香の名にもちひ侍る事、このごろおほく侍れば左の勝にて侍るべきよし一同に申なり、略○中

六番 左

ねぬよの夢

右勝

やまぶき

左の香よろしすがりもあしからずしかりといへどもこれもかうあたらしくきこゆ右の香よろしいにしへのまゝらにといふともおとるまじくきこゆすがりもよろし尤右勝なるべし左ねぬよのゆめは續古今夏寂蓮法師のきちかきはなたちばなのかほりきてねぬよの夢はむかしなりけりとり所も名のとなくもよろし右のやまぶきは古今春下讀人しらす春雨のにはへる色もあかなくにかさへなつかし山ぶきのはななんなき名なるべし左ねぬよの夢もよろしといへどもたち花の詞にて名づけ侍ることめづらしげなし香も名も右の勝になり侍りける

文明十一年五月十二日於東山殿執行之

〔名香合 志野宗信家〕一番

左 逍遙

清偶信秀直

右 中河

柏靈

宵柏

大偶

ひだりの香さるものときこえて、莊子の逍遙遊の心までをのづからおもひいづるやうに侍ぬ